



昭和53年(1978年)

5月号(No.395)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

豆とマウント・クック	(池田智津子).....(1)
屏風岩正面岩壁の登攀について(上)	(石岡繁雄).....(2)
フィルムライブラリーから	
歴史的な記録映画二本	(4)
エベレスト1924年(國分勘兵衛)	
ナンダ・コット(竹節作太)	
図書紹介	(5)
小島烏水一山の風流使者伝一	
日本山岳会学生会部年報第6号	
紫岳	
ルーム基金応募者ご芳名(10)	(6)
お知らせと報告	(8)
東西南北	(8)
自然保護情報	
北海道の山の自然とその保護	
(辻井達一)	(10)
追悼 深田志げ子さん	(11)
会務報告・ルーム日誌・会員動向	(10)
カット/松本慎太郎・山里寿男・谷アユ子	

豆とマウント・クック

——ニュージーランドの山と人——

池田智津子

「今日、ハミテージに降りたら登頂祝いのディナーに招待しよう!」それを聞いて私はどうやら無意識のうちにガツカリした顔をしたらしい。グレン氏があわてて付け加えた。「豆じゃないから」と。ディナーは豆じゃないから」と。山に入ってから一週間、豆しか食べない彼につき合って朝昼晩と豆ばかり。(下へ降りたら、今日のディナーは、でっかいステーキとプリンをお腹いっぱい食べよう)そう思って楽しみにしていた矢先の招待である。しかし豆ではないという。そこでニコリ笑って答えた。「喜んで御一緒させていただきます。」

一週間前の十二月(一九七七年)二十八日、以前から約束していたニック氏の都合が悪くなり、友人のグレン氏がザイルを組んでくれることとなった。彼は何度もクックにアタックしたというクックに、まだ一度も登頂に成功していないというのだが……。そこでメンバーはグレン氏、工藤氏そして私の三人パーティーとなった。しかし工藤氏は仕事の都合で一週間しか余裕がないとのこと。できればその一週間で一緒にクックに登りたいものである。彼はいつもポケットに娘の写真を入れているやさしく頼もしい一児のパパであ

る。そして私もグリーンランドの山やアフリカの山等と一緒に登ったりした勝手知ったる山友達でお互いの力量を良く知っているが、グレン氏とはまったくの初対面である。物静かであるが、クライマーというより夜空の星を数える詩人というタイプである。そして一種異様な風格があり、何ともとらえどころがない。さて早速グレン氏から「山での食事はどうする?」と尋ねられた。「何でも食べられるからまかせろ」と言ったのがまずかった。「それじゃ君はこれだけ背負ってくれ!」と渡されたいくつかの豆の袋、何も考えずザックにつめ込んだ。そして即、出発。初日はハーストリッジを登ってハースト小屋まで。小屋に着くとすぐグレン氏が豆のごはんを作ってくれた。翌朝も豆を食べて出発。三、四時間かけてプラト小屋へ。先客

約二〇名、ニュージーランド、オーストラリア、スイス、アメリカそして日本の各パーティーである。さっそく自分のベッドを確保、シュラフ付きた。そしてガス、なべ、食器、すべて揃っている台所。我々が下から持ってあがらなければならぬのは登攀用具と料理の材料だけ。すばらしい設備である。ニュージーランドにあるほとんどの小屋がそうである。うらやましい限りだ。さてグレン氏と工藤氏がザックから出した豆の袋を見て愕然とした。豆の袋ばかりでおかずがない。他のパーティーはテーブルにおいしいような料理を並べて食べている。しかしもう遅い。指をくわえて見るだけだ。

三日目、天気は良いがクック山だけ雲に包まれている。そこで小屋にいた全員がトレーニングを兼ねアンザック・ピークへアタック。グレン氏の氷雪技術はたいしたもののである。しかし岩場はどうもいけない。苦手らしい。頂上で昼食、もちろん豆。ピーナッツの蜂蜜漬けである。他のパーティーは星過ぎ小屋に戻ってしまったが我々のはんびり遊んで夕方小屋へ。皆すでに食事もありシュラフにもぐり込んでいる。どうも様子がおかしいと思ったら皆、明日クックにアタックするという。私はふり向いてグレン氏に尋ねた。「グレン! もちろん私達も明日アタックするんでしょ?」と。しかし答えはノーだった。

夜の十二時、皆起き出し準備を始めた。全部で七パーティーである。空は満天の星だ。皆の健闘を祈りシュラフへもぐり込む。翌朝起きると望遠レンズをもって外へとびだしたがどこにも人影はない。ちょうど影に入っているのだろう。星頃、再び出て見ると何パーティーかが下ってくるのが目に入った。残念ながら全パーティー敗退のようである。なにしろこのクック山は条件がとてつもない。不安定な天気、危険なクレバス、頻りに落ちるナダレ、そして硬い氷。技術以

山をきれいに「ミ」は持ち帰る

前の問題が多い。一年に何十パーティもアタックし、登頂できるのはそのうちたったの三、四パーティと聞いてビックリしてしまった。しかし現にグレレン氏は十回近くアタックし、一度も登頂できないでいるのだ。まさかそんなに確率が悪いとは思ひもしなかった。私自身今回の旅の目的はクック山ではなく、オーストラリアの小さな山である。ただ一ヶ月の休暇をもらえたのでついでにクックでも登ってみようか、などと簡単に考え、大した予備知識もなく来てしまったが、最初からそんな山だと分っていたらやめていただろう。知らないとは何とも恐ろしいことである。

しかしせっかくここまで来たのである。一応登れるところまででも登らないと格好がつかない。そこで翌日のアタックにそなえ、装備を点検し早目にシュラフへもぐり込んだ。そして十二時起床、空は降るような星である。

一月二日(一九七八年)一時に小屋を出発。まずはグランドプラトのクレバス地帯。時々トップのグレレン氏がスポンと潜り、私はあわててビッケルを突きさしザイルを固定する。どこにクレバスがあいているか、まったくわからない。次はナダレの巣に入ってしまった。この地帯は早く通り抜けなければならぬ。全速力で登り最後のトラバースを終え、ホッとした

途端、ゴーツという地響きがした。我々が登ってきたルートの上に、ものすごいナダレが落ちてきた。危機一髪である。

空が白みだした五時、サミットロック下に到着。いよいよグレレン氏苦手の岩場である。トップを交代した方が良いかな、と思っていたところ突然、岩場に背を向けると氷の斜面を降りだした。そして氷壁の下へ行くことを見上げ胸を張ってこう言った。「この壁を登る」と。それを聞いて私は冷汗がでてきた。しかしもう後には引けない。彼は楽しそうに登りだした。さすが氷壁に関しては世界一といわれているニュージーランドのクライマーである。しかし私は慣れない氷壁に悪戦苦闘の連続。なんと七時間かかってやっとそこを抜けることができた。そこから頂上までは四十五度から六十度の斜面が約十ピッチ続く。先程の壁より傾斜はゆるくなったが、硬い碧水でアイゼンの先が一ミリとささらず不安定このうえない。

硬い氷にも慣れてきた頃グレレン氏が「チョット先に行ってくれないか」と言った。と、そこが頂上だった。感激の握手。午後四時だ。セスナ機が飛んできて頂上から挨拶してくれる。うれしかったが私自身はそれどころじゃない。どうにかこうにか登るに登ったが無事に降りられる自信などまったくない。

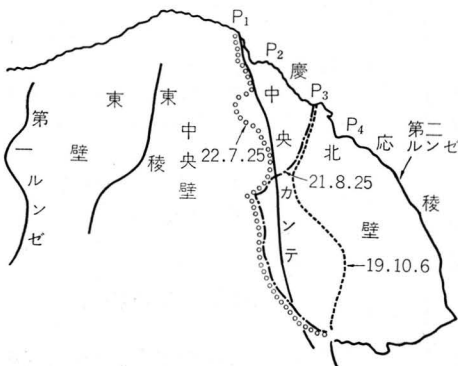
屏風岩正面岩壁の

登攀について(上)

岩稜会 石岡繁雄

一、屏風岩正面岩壁と戦前における登山界懸案の岩壁との関係

前穂高岳から東北に向って派生した北尾根は横尾谷に向って急角度で落ちこんでいるが、その部分の岩壁を屏風岩と称している。またこの岩壁には、向って左から第一ルンゼ、第二ルンゼおよび第三ルンゼの三つの急な谷が喰いこんでいて、第一ルンゼと第二ルンゼの間の岩壁を屏風岩正面岩壁と称している。屏風岩正面岩壁は第1図のごとく東壁、中央壁および北壁からなり、東壁と中央壁の間の稜を東稜、中央壁と北壁との間の稜を中央カンテ、北壁と第二ルンゼの間の稜を慶応稜と称している。さて横尾岩小舎付近から下流の横尾谷とか、横尾谷と梓川の出合付近から屏風岩を眺めると



第1図 一のガリから眺めた屏風岩



第2図 横尾岩小舎下流の河原から眺めた屏風岩

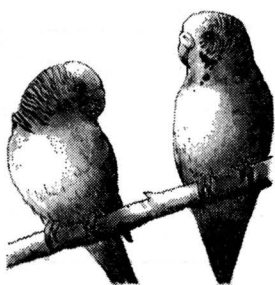
きには、第2図に示すごとく、東壁・東稜、中央壁および中央カンテが眺められるが、この部分の岩壁は、全体が滑らかな感じの、高さ約六〇メートルの圧倒的な一大岩壁となっており、戦前、登攀不可能の象徴のように言われ、穂高岳、剣岳等本邦におけるほとんどすべての岩壁が登られた後も手つかずで残され、この岩壁の登攀は登山界の懸案であり、スポーツアルピニズムの最大の目標であった。

これに反して第二ルンゼに近い北壁は、地形が複雑であり(第一岩溝、第二岩溝等を有する)岩壁の半ば以上が灌木でおおわれており、登山界懸案の岩壁ではない(北壁が登攀されても登山界の懸案が解決したことにならない)。

要するに屏風岩正面岩壁は、登山界懸案の岩壁とそうでない岩壁とからなる。

二、登攀記録と評価

(1) 大正十三年七月七日、八日、慶応山岳部の青木勝、大賀道男、佐藤久一朗は慶応稜を登攀した(屏風岩正面岩壁の範囲を前述のごとくに定めるときには、慶応稜の登攀は屏風岩正面岩壁の初登攀となる。しかし登山界にそのような評価はない。けっきょく慶応稜を、屏風岩正面岩壁に含めないことが妥当のようである。)



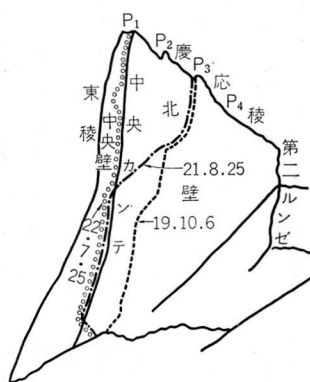
一時間半、頂上にいて下山開始。案の定、例の壁の途中で日が落ちてしまい、ヘッドランプを点灯で、氷壁のダブルアックス下降で、もう生きた心地がしない。だんだん氷が硬くなり、アイスハンマーさえ、はじき返されてしまふようになった。アイゼンの出番も一度や二度、壁に打ちつけた位ではまったくささってくれない。だんだん足先の感覚がなくなってくる。さすがのグレン氏もグツと、慎重になり一步一步確認しながら

に登頂できたのである。余程うれしかったのだろう。クックの写真の裏に次のような詩を書いてプレゼントしてくれた。「やわらかい雪、クレバス、そして硬い氷を無事通過し、クックの頂上に立てたのだから、あなたがいつもニコニコ笑っていてくれたから。そのほほえみに感謝します。ありがとう」と。

しかしグレン氏は大きな勘違いをしていたようだ。小屋を出てからもどってくるまでの二十五時間、私は緊張の連続でとても笑う余裕などなかったのだから。きつと恐ろしくて、ひきつった顔が彼には、ほほえんで見えたのかも知れない。

ハミテージに降りてからもアンウィン・パット（ニュージールランド山岳会のメンバーズ・ヒュッテンに泊まっている時、何人かの人からこう言われた。「さすがにジャヌー北壁をやった日本の女性はすごい」）ちょっと来て簡単にクックへ登ってしまふのだから」と。

「冗談じゃない、あの悪戦苦闘の状況を見られなくて良かった。今回はたまたま運良く登れてしまっただけである。グレン氏と豆の印象に残ったことは？」と聞かれ頭に浮かんだのは、クック山でも、オーストラリアの小さな山でもなく、色とりどりの豆の袋とあのグレン氏の瞑想にふけっている顔であつた。



第3図 四のガリーから眺めた屏風岩

(2) 昭和十九年十月五日(六日、八高山岳部)のO・B、大野峯夫と伊藤洋平(順序は先輩から)は、第1図と第3図に示す $19 \cdot 10 \cdot 6$ のルートつまり北壁から慶応稜のP3にいたり、その後慶応稜を登って岩場の頭P1に達するルートを登攀した。

この登攀は登山界の懸案の岩壁を登攀したものでなく、また北壁の初登攀（完登）でもない。北壁の初登攀のためには、北壁のみを登って直接P1に達しなくてはならない。しかるに19・10・6のルートは、ルートの上部が既登の慶応稜となっている。たとえばマッターホーンの四つの稜線が登られた後、次の目標はそれらの稜線にはさまれた岩壁となった。それらの岩壁を完登するためには、登攀ルートの中に既登の稜線が含まれてはいけない。事実、シュミットの北壁をはじめ各岩壁初登攀者は、いずれも直接岩壁のみを登って頂上に達している。つまり岩壁の初登攀のためにはダイレクトが要求される。

(3) 昭和二十一年八月二十五日、八高山岳部OB石岡繁雄、伊藤洋平、岩稜会松田武雄、豊田耕雄は、第1図と第3図に示す21・8・25のルートに登攀した。

この登攀も19・10・6のルートの登攀同様、登山界の懸案を解決した登攀でなく、また北壁

を完登したものでもない。

(4) 昭和二十二年七月二十四日、二十五日、岩棲会石岡繁雄、本田善郎、松田武雄は、第1図・第2図および第3図の22・7・25のルート、つまり中央カンテまたは中央壁を登って、岩場の頭P1に達した。この登攀は、登山界の懸案を解決した登攀である。

(5) 昭和二十三年三月二十四日～二十五日、八高山岳部OB、伊藤洋平、大津秀夫は21・8・25のルートを登攀した。

(6) 昭和三十三年十二月二十九日～三十日、RCC吉尾弘、芳野満彦、小板橋徹および名古屋山岳会加藤幸彦、前園陽太郎は、ほぼ中央カシテにそって登攀した。

この登攀は、登山界懸案の岩壁の積雪期の初登攀である。

さて戦争中から戦後にかけて行なった屏風岩正面岩壁に関連する一連の登攀の最終目標は、いうまでもなく登山界懸案の岩壁の登攀であり、懸案の岩壁の裏側にあるブッシュに包まれた北壁の登攀とか、ましてや登攀ルートの上部を既登の慶応校に求めるようなダイレクトに欠けるルートの登攀ではなかった。北壁におけるいく度かの登攀は、懸案の岩壁を登るための予備的な登攀であった。そして昭和二十二年七月、懸案の岩壁、中央カンテを登ったのである。

したがって登山界で評価されなくてはならぬものは、中央カンテの登攀である（昭和三十三年十二月の積雪期の中央カンテの登攀もそれに次いで高く評価されなくてはならない）。しかしながら現在の登山界には、北壁での予備的な一面登攀のみを高く評価し、登山界の懸案を解決した登攀をまったく評価しないという奇妙な一面がある。もちろんその逆の評価もある。以下次号にこの点を記す。

『フィルム・ライブラリーから』

歴史的な記録映画二本

先般お伝えしましたように、貴重な記録映画が二本、会の所蔵となりました。ご寄贈いただいた二氏に、これらの映画にまつわる思い出を執筆していただきましたのでご紹介いたします。

『エベレスト 1924 年』

衛兵勘分
(旧名貫一)

「マウント・エベレスト一九二四年」の十六ミリフィルムを購入したのは、昭和五年頃と思います。何かの雑誌の広告に、十六ミリ判の一九二四年エベレストの遠征隊の記録映画が発売されているのを知り、丸善に頼んでとってもらったように記憶しています。

当時、山岳部（慶応）の連中や先輩の団体である登高会の人々に披露したと思います。

れて探してみたところ、出てきたのです。

山の連中は割合ルーズな人が多く、貸したものは余程催促でもない限り大体返ってこないのが普通です。私も誰かに貸した覚えがあるのでもうなまになつていて、このとき、家にあるとは思っていませんでした。

三田さんはそのフィルムを複製され、英国のエベレスト関係者に見せられたところ、こんな映画があるとは知らなかった、と、大変珍重されたようでした。

フィルムも古くなるとバラバラになる事もありますので、これを保存するために八ミリに再製しました。その一卷を、今度日本山岳会へ寄贈した次第です。

このフィルムは、Captain John Noel が撮影したものです。多分版權は、英国王立地理学協会とアルパインクラブと協同で作った、マウント・エベレスト・コムミッティに属しているものだと思います。

そのネガは、この両者のうちの何れかに保存されていることと思います。

『ナンダ・コット』

太 節 竹

映画ナンダ・コットが街の映画館で上映されるなんて、私は考えでもみなかった。

ナンダ・コットへ出発の前日、急に会社の映画課長に呼ばれて、アイモのスタンダード撮影機と五〇〇〇フィートのフィルムを渡された。

「なんともものになるよう撮して来い」

とたんにギャフンとした。

安物のカメラでさえ扱いかねている私に、映画なんて撮れるはずはない。

本職のカメラマンが、機の取扱、絞り、いろいろと説明してくれたが、何から何まで素人の私にはさっぱりわからない。

だが、いやとはいえない。なるようになれと捨鉢気味で引受けた。

カルカタまでの一カ月の船旅、ガンジス平野を横断、山麓二週間のキャラバン、いずれも蒸されるように湿った気温に耐えるために、フィルムは乾燥剤で入念に

包まれた。

カルカタ上陸からベースキャンプまでは浜野隊員も撮影を手伝ってくれた。

山麓キャラバン中に、風景や次々と変わる民族の風習など、撮っておけばよかったと後悔したが、折しも雨期で、毎日のようにドシヤ降りの雨が襲って、前方を見つめて歩くだけが精一杯で、カメラをとり出すのが容易でなかった。最も残念だったのは、三千メートルのカラムニ峠の密林で数々のラングール猿に囲まれた時、アイモを担いだポーターが遅れたため、その壮観を撮れなかったことだった。

さて、ベースキャンプに入っていよいよ登山を開始するとベラボーに忙しくなった。アルモラから連れて来たドチアル族のポーター十五人が、どうやら第二キャンプまでは荷上げしてくれたが、それから上は隊員五人とシェルパー一人だけで負い上げなければならぬ。

第一キャンプでシェルパー一人が肺炎となって隊を去り、サーダールは老齢で荷役に加われない。そんなことでアイモなど負い上げる余裕さえない。したがってキャンプの奥に押しこめられ忘れ去られた。

九月二十九日第一回頂上アタックの朝、意を決してアイモとフィルム五〇〇フィートを自分のリュックに入れた。なんとかして登頂

のシーンを撮りたかったのだ。

この重量十キロ余は他の隊員より余分のわけだ。ひどくこたえた。それよりも登山中にアイモをリュックから出して写し、次いでカメラの番。仲間の二倍の仕事をしなければならぬ。その時はアンザイレンしつていなかったで、仲間はドンドン先へ行ってしまふ。

私は急いでアイモとカメラをリュックに入れて後を追うのだが、どうしても遅れてしまふ。その遅れをとり戻すには死にもの狂いの馬力を出さなければならぬ。もう六千メートルを越えたとじとしていてさえ呼吸が苦しいのに、重い荷を負っての登りである。心臓が口からとび出しそうなほど苦しかった。今でも思い出してゾッとすることがある。

第一回アタックは悪天のため頂上まで一〇〇メートルを残して時間切れとなり引返した。

この時、六五〇〇メートルの雪中にアイモとフィルム三〇〇フィートを埋めて再挙の日に役立てようとした。

十月五日第二回アタック。これに失敗すれば、近づく酷寒、運搬力不足、帰路の長さなどあらゆる点から第三回は不可能と考えられた。

幸いにシェルバのアンツェリンは病気がなおってアタックに加わり、炊事の大役を引受けてくれた。

予想外の好天に恵まれて、前回より二時間も早くアイモを埋めた地点に午前十時に到達して大休止することになった。

早速アイモを掘り出して陽光に当てた。

一〇分余でアイモは温まり、カタカタと快調に廻りだした。これからは、雪庇と正面壁の継目の急峻を登るのである。トップとラストがザイルを確保し、他の四人はそれを伝って登る方法を取り、順調に高度をかせいでついに頂上から張り出した雪庇の下に來た。あと三〇メートルで頂上である。

「行くぞ!」と、堀田隊長はピッケルを力一杯振りかぶってステップを切り始めた。

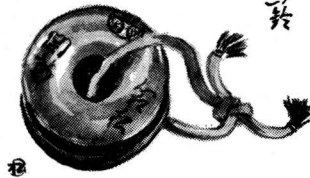
私はこの記念すべき瞬間を写そうと、しっかり足場を定めてからアイモのボタンを押した。隊長のステップがつぎつぎと踏み出されるのを追って、アイモはカタカタとリズムカルな音をたてる。ついに頂上に張り出した雪庇を切り始めた。あと一メートルで頂上だ。隊長は身体をエビのように反りかえらせて雪庇を切っている。雪片が四方にとび散って刻々と登頂の瞬間が近づく。と、雪庇の真中にボカリと穴があいた。その穴から突き上げた隊長の手が頂上にかかった。身体をせり上げている。胸が、腰が、膝が、おう、足が、立った。登った。のぞいているフアインダーが涙でくもって何も見え

なくなつた。

いままでに数多くのヒマラヤ映画は撮られたが、全部が十六ミリで撮影され、スタンダードを頂上まで持ち上げたのはナンダ・コッパだけと聞いている。

とも角、ズブの素人の私。高山の強い日射に対する絞りなどさっぱりわからなかった。いたるところでカメラを振り廻しているし、山の角度も考えずに写している。これはお断りしておくが、画中で

尾鈴

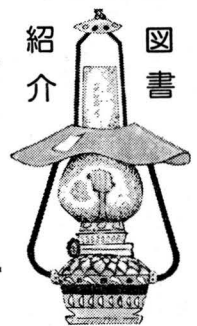


チャカチャカとやけに早く身体を動かすシーンがあるが、これは寒気のため規定のコマが回らなくなつたのと、そのコマもトーカーと数が違うからである。

映画ナンダ・コッパは近藤伊与吉氏が監督編集し、NHK浅沼アナウンサーの解説で四巻にまとめられ、街の映画館に上映された。私に一本寄贈された。ところが戦災で映画会社所蔵のものが全焼した。

私のだけ残った。

図書



紹介

小島鳥水

山の風流使者伝

近藤信行著

小島鳥水伝は、会員のたれかが書いてくれるといいがと、かねがね思っていたが、その対象の大きさ、幅の広さのためか、あるいは身近な存在でありすぎたせいかなかなか手がけようとする人はあらわれなかった。ありがたいことに近藤信行さんがその難事業に敢然と取り組み、ここに、その成果を世に問うまでになったのである。

この執筆がはじまったのは、昭和四十五年八月のことだという。雑誌「アルプ」の一五二号(四十五年十月刊)から「文庫」時代の小島鳥水のシリーズが十八回にわたって連載され、ついで「小島鳥水・山の風流使者伝」へと移って、同誌二〇七号(五十五年五月刊)で二十一回目、大正二年までを終っている。本書には、右のうち、生い立ちから明治四十三年までの鳥水の肖像がおさめられるこ

とになった。この紹介の小文を草するにあたって、「アルプ」を取り出して連載当時の文章を読みくらべてみたが、文筆を尊び、また編集者としての経験も豊かな近藤さんらしく、単行本として世に問うために、随処に補修の筆をこまかく加えていることを知った。

小島さんの業績について、その先蹤者としての山登りに関しては、当然のことながら本会の会員諸氏が、かなり詳細に承知していると思われるが、鳥水の業績は実に多岐にわたり、しかも、それぞれの分野で立派に一家をなしている。「したがって、一人の登山家、紀行文家というだけでは、けしととらえきれないのであって、小島鳥水の全体像にどこまで迫り得るかが私の課題であった」と著者も述べている。その認識の上に立つて、「登山行為をとおして人間と自然とのかかわり、あくことなき美へのあこがれ、明治の気骨をそなえたディレッタントイズム、それらを彼の内面的経過とともに総合することによって、彼の生涯をとらえてみたかった」というのが、近藤さんの執筆態度であった。そのような総合的な鳥水伝が、本会会員の手によって書かれたことを、まず喜びとしたい。

本書には、鳥水関係の新資料がいろいろ含まれている。とくに重要なのは、若き日の鳥水の人形成に、雑誌「文庫」を通じて深

甚な影響を与えた滝沢秋曉あてに書かれた鳥水の書簡五十五通が、はじめて公けにされたことである。信州上田の滝沢家を訪れて、この鳥水書簡に接する機会を得たことが、そもそも鳥水伝の筆をとるきっかけとなった、と著者も語っているほどである。鳥水の投書が「文庫」にはじめて採用されたのは明治二十八年、二十二歳の折というから、いらい「文庫」が廃刊となった明治四十三年までの十五年間は、鳥水の人間形成をたどる上で大切な時期である。

それなのに、小島さんという山の話ばかりに限りがちであったわけだから、この新しい資料にもとづいて、「文庫」時代の鳥水に照明が当てられたことの意義は大きい。目を開かれたのは山仲間の間だけのことでなく、明治文学史に関心を持つ人たちにとてもこれは貴重な寄与とされるのであるまいか。青年相手の投書雑誌として、明治文壇の主流から軽視されがちであった「文庫」について、近藤さんは鳥水とともに文庫派詩人や批評家たちの若い姿を前景に置きつつ、明治文壇の側面史を描き出しているのである。

鳥水書簡の発見とともに、もう一つの新資料が著者の手で捜し出されている。それは一九〇二年十一月一日付の英字紙「ジャパン・ウィークリー・メール」である。鳥水が明治三十七年に雑誌「太陽」

ルーム基金応募者

ご芳名(10)

(昭和53年4月10日現在)

敬称略・順不同)

〔東京の部〕一口一万円 数字は口数
 (3) 炉辺会(一) 徳久球雄、阪本
 伸一、本多國雄
 小計 六口 金六〇、〇〇〇円

累計 一一四五・九口

金一一、四五九、〇〇〇円

〔地方の部〕一口五千円 数字は口数
 (3) 末松大助(2) 浅利欣吉、宮
 森常雄、吉村健児(1) 山村信雄、
 大槻氏巴、庄司駒男
 小計 一二口 金六〇、〇〇〇円
 累計 一一五五・九口
 金五、七七九、五〇〇円

今回の合計 金二二〇、〇〇〇円

大累計 金二七、二三八、五〇〇円

申込人員 東京 五九四名

地方 五一一名

計 一一〇五名

法人からの寄付(5月4日現在入金
 済み)
 金一一、七二〇、〇〇〇円

二月号に寄せた「甲斐の白峰」に
 対して、武田久吉博士から疑問が
 投げられたことは、会員の間では
 周知のところであるが、この英字
 紙に掲載されたウェストン師の
 「甲斐ヶ根の登山」全文を鳥水の
 文章と比較対照して、著者は「甲
 斐の白根」が翻案による架空登山
 記であるとの結論に達したのであ
 った。

紀行文に「室内捏造は論外」と
 断じたその人が「文筆家として
 敵愾な行為をおこなった」のは何
 故か——当然の筋道であるが、近
 藤さんは伝記作家として、その謎
 を追って行く。「私は鳥水その人
 のア・モラルな行為を惜しむが、
 彼の明治三十年代の先駆的栄光に
 暗い影をおとしてしまったことを
 みとめないわけにはいかない」と
 述べ、暗い影を招いた遠因を、鳥
 水その人の生い立ちを通じて形づ
 くられた性情、処世態度などにも
 求めつつ、「鳥水の山岳鑽仰のこ

ころ、その表現としての紀行文や
 エッセイが、たとえ鳥水個人のた
 んなる趣味であつたにせよ、文筆
 家としては彼がアマチュアのあい
 まいな領域にとどまっていたとい
 うに、主因があつたのではない
 か」と推論している。この架空登
 山記とその暗い影については、私
 がここで単純化して記すべきでは
 なく、著者は実にキメのこまかな
 分析を行なっていることを、むし
 ろ強調しておきたい。

新しい資料の発掘とともに注目
 されるのは、鳥水の登山記で納得
 のゆかぬ経路について、しばしば
 著者みずから追跡登山を行なつて
 いることである。明治三十六年の
 槍ヶ岳登山の折に鳥水が霞沢岳を
 越えて梓川の谷へ下ったことを不
 思議に思い、昭和四十九、五十の
 二年、霞沢岳東面からのルート踏
 査を二回も行なっており、これに
 ついて「山」三五三、三六九、三
 七〇の各号に詳しく報告してい
 る。また、明治四十年、四十一年

の白峰山脈探索登山の経路につい
 も、昭和五十一年に著者は実地に
 入って、鳥水の足跡を捉えて来
 た。これら踏査の収穫は、本文の
 なかで業々しくは示されていなが
 ら、鳥水の採った経路などに触れ
 る場合、確信をもって書かれてい
 ることが感じられる。こういう地
 道な努力があつてこそ、がっちり
 した基盤の上に評伝というものは
 書きあげられるのだということ
 を、近藤さんの著書は静かに語つ
 ていると思う。

画各一葉、定価三五〇〇円。
 (島田 巽)

日本山岳会学生部
 年報第6号

日本山岳会学生部年報の第6号
 が発行された。といっても、本書
 は、5号までとは体裁も内容も全
 く一新されている。全体の構成は
 巻頭言「大学山岳部への提言」、
 I 特集「大学山岳部の原点を探
 る」、II 学生部海外登山報告、
 III 山の講座、IV 随想、V 加
 盟団体積雪期山行記録1970年
 1975年、VI 1975年度学生
 部活動報告からなっているが、内
 容としては質的にも量的にもIの
 特集が圧倒的な比重を占めている
 の。この特集に収録されているの
 は「かつて関東地区大学山岳部
 によって成された特色ある好山行記
 録8編」(戦前の早大による滝谷、
 立大によるナンダ・コート、終戦
 直後の日大による北鎌尾根独標側
 稜より北穂高、慶大による劔より
 西穂高、昭和40年代の日大による
 宇奈月より西穂高、芝工大による
 利尻岳、最近の都立大による白馬
 岳名劔尾根、早大による大タテガ
 ビンよりハツ峰)である。これら
 の記録の半数以上は、すでにかつ

て各々の大学の部報やその他の雑
 誌などに掲載されたものとはい
 え、現在では入手も困難であらう
 し、それ以上にこれらをまとめて
 通覧することによって、大学山岳
 部のおこなってきた登山の流れを
 ある程度識ることができるとい
 う意味で、この特集は貴重である
 といえよう。

しかし、編者がこの特集を組ん
 だ意図は、決して単に回顧的な意
 味で、大学山岳部の過去の記録を
 たどることにあつたのではなく、
 むしろその冒頭で編者自身が「そ
 れらの記録を基に、大学山岳部の
 原点」を探り、「今後の山行、部
 活動を考える上での参考にして貰
 いたい」とのべているように、あ
 くまで、現在の大学山岳部のあり
 かたを再考するきっかけを提供す
 ることにある。そして、その背景
 には、いわゆる「大学山岳部の低
 迷」状態へのいらだたしさと、打
 破への願いが込められていたに
 ちがいない。その意味で、この記
 録集の形をとる特集は、一つの視
 点から編集された大学山岳部の歴
 史であるとともに、歴史というも
 のが多かれ少なかれそうであるよ
 うに、現在への、すなわちここで
 は現役の大学山岳部員たちへの、
 一つのアップビルであるといえる
 だろう。

ところで、ここにとりあげられ
 ているのは各々に異なった時代と
 条件とを背景とし、異なった地域

と形式で行なわれた山行の記録である。けれどもそれらを通じていくつかの共通点を見出すことも可能である。例えば、それらが各々の時代において水準を抜いた個性的な登山であること、にもかかわらず、というよりむしろ、だからこそ、というべきなのかもしれないが、いずれの登山も、かなり明確に次のステップを目指してなされていること、などがそれである。当時の日本の登山界では破天荒の計画であったはずのナンダ・コート遠征すら、筆者自身によって、より充実した将来のヒマラヤ登山へのマイルストーンとして位置づけられている。自らの意志によって、より未知なるもの、より困難な対象を選び、それに挑んでゆこうとするなら、必然的にそうならざるをえない、それが登山の原点なのだ、そうこの特集はよびかけている。

だが、さてよ、と、多くの大学山岳部員、ないしOB達はいうかもしれない。なるほど、登山の原点はそうだろう。しかし「大学山岳部の原点」を、それと同じものと考えていいのだろうか。登山全体のレベルアップの中で、4年間というきわめて限られた期間に、お世辞にも秀れた素質をもっているとはいえない、数少ない新人達を、なんとかリーダーにまで育てあげなければならぬ。おまけに仮にも大学教育の一環とかいう名

の下につきまとう様々の制約。これらの条件の下で、一体どうやって、個性を貫き通し、自ら選んだ対象にエネルギーを集中してゆけるというのか。登山の原点を追い求めることがそのまま大学山岳部の原点でありえた幸福な時代は、今や過ぎ去ったのではない。だから、今、目の前に横たわる限界を見定めることなしに、いたずらに過去の栄光を追うことが、果たしてどれほどの意味があるだろうか。

多分、まじめに大学山岳部というものを考える人なら、一度ならずそういった懷疑と焦燥にとらわれるのではない。けれども、ここに収録されたどの記録にしても実は各々に、決して恵まれていたとはいえない条件の下でなしたとげられてきたのだし、その結果にしても、客観的な評価は別として、当時者にとっては必ずしも完全に満足のゆくものではなかったことが、読みとれるのだ。登山が「遊び」の一種である以上、一定の条件、制約の中でのみ成立する「遊び」というものの宿命を、登山もやはり、負わなければならないのだ。これらの記録を、単なる成果として評価するのではなく、各々の条件の中で精一杯なされた試行としてとらえなおすならば、案外、「原点」としての意味がうかび上ってくるのかもしれないと、私は思う。

II以降については紙数もないので、簡単な紹介にとどめておく。IIは1973年ヒマチャル・ブラデッシュ・ヒマラヤ登山隊のプーナム峰登頂とミヤール・ナラ踏査、及び、1976年ガルワル・ヒマラヤ登山隊のドゥナギリ北稜登頂の二つの学生部登山隊の記録であるが、前者は幾分おごなりの感を免れない。経験の継承は必ずしも活字にすることは限らないだろうが、まとめる以上、もう少ししっかりとかならなかったものか。

IIIは、高層気象ノート(気象庁予報官市川清見氏)と、黒部別山登山の歩み(学生部黒部研究会)、IVは初見一雄、成川隆雄、長谷川良典、竹中昇、阿部吉秀各氏の随想、Vは加盟49団体の積雪期の山行リストからなる。地味な記事だが、まとめの努力は多としたい。以上、本書をどちらかといえば独立した本として扱い、感想をのべたが、学生部年報の1冊として考えた場合、別の問題が生じよう。編者の努力と、それ以上に明確な主張を貫き通した姿勢には敬服するし、5号までの内容、スタイルを無条件に支持するわけでも決していない。さらにこの6号が1970年から75年までの6年分を扱うことになった特殊な事情も理解できないではない。しかし、次号以降で6号の規模、スタイルを踏襲することは、まず不可能であ

ろうと思う。すでに76、77年度は過ぎたわけだが、地味なものでもできる限り間隔をつめて発刊されるのが、やはり望ましいのではない。7号の担当者には、6号のスタイルにとらわれず、個性的な姿勢と熱意とを学んでほしいとあえてのべておきたい。

日本山岳会学生部発行・編集
若溪堂発売、271ページ、
定価三六〇〇円。(鹿野勝彦)

紫 岳

編 静岡高校山岳部
静岡大学山岳部

旧制大学、高校山岳部の部報というものは、なかなか読みごたえがあり、充実した内容を持つものが多かった。旧制大学のものでは慶大の「登高行」、早大の「リュックサック」、明大の「ろばた」、法大の「山想」、立大の「部報」、北大の「部報」など戦前の貴重な報告書はほとんど本会の図書室にも収められているが、旧静岡高校山岳部の部報「紫岳」までは手がまわらなかったというのが現状であった。

今回一九三三年発行の「紫岳」創刊号から一九五二年発行の第十一号、および「紫岳」の前身である一九二九年発行の「山彦」をあ

わせ、その主要記事をまとめて一冊とした「紫岳・一高校山岳部の詩と真実」が同校および大学山岳部の手により出版された。内容は二部に分れ、第一部は山行記録、海外遠征記録、紀行、研究・紹介、創作・随想、第二部は部および会回想・追悼、小史にわけ、ことに山行記録では南アルプスを中心とした主要なパイオニア・ワークを並べ、海外遠征記録ではコロンビアのサンタ・マルタ山群紀行、一九七〇年秋のチュレーン・ヒマール登頂、一九七五年のテラム・カシリ初登頂と三つの報告が光っている。

小史では静岡高校、および静岡大学山岳部の変せんを要領よくまとめ、静岡高校山岳部主要山行一覧表を付してあるのも編集者の苦心のあととをうかがわせる。巻末にくわしく地名索引が出ており、まことに親切だが、部報類を集めている側からいうと、創刊号から十一号までの各号の目次一覧もほしかった。いずれにしても堂堂とした南アルプスにおける貴重な文献が手もとに置けるようになったことは、まことに有意義なことと思う。

昭和五十二年十一月一日、朝日出版社発行、四六七ページ、写真多数、定価三〇〇〇円。

(山崎安治)

お知らせと報告

お知らせ

第三七一回ルウム小集会

会津の山を語る会

日時 6月20日(火)

午後6時30分より

場所 本会ルーム

会費 五〇〇円

四季折々に訪れる者を魅了してやまない会津……。そこには、押し寄せる開発の波を拒み続けてきた山と里がある……。

昨年の「越後の山を語る会」に引き続き、今回は会津の山々について、その魅力を探ります。ささやかながら会津の銘酒も用意いたします。多数お集り下さい。

(集委員会)

お知らせ

ドイツ山岳会との

合同登山

日本山岳会青年懇談会では、ドイツ山岳会との交流登山を行なっており、昨年は本会から5名をドイツに送り出しました。本年は8月13日から9月2日までの予定でドイツ山岳会から8名が来日し、青年懇談会を主体にして穂高、剣岳で合同交流登山を行います。つきましては、日本での案内、

来年夏にドイツへ行ける方など、ドイツ山岳会との交流を希望する方をつのっております。

なお、本年来日するドイツ隊は日本での生活を一般家庭で過ごし人と人との交流を望んでおりますので、山での生活、東京での生活などご協力をいただける方は、山岳会事務局、または青年懇談会(担当理事橋本・浅田)までご連絡下さい。ドイツ山岳会の来日スケジュール等を説明いたします。

(日本山岳会青年懇談会)

報告

第三六九回ルウム小集会

マカルー西稜映画会

——ヤニック・セニール氏を囲んで——

通訳・近藤 等氏

3月29日(水)本会ルームに一九七一年マカルー西稜登攀者ヤニック・セニール氏を迎えて映画会を行なった。

セニール氏の紹介に続き、さっそく映画の上映に入ったが、ここでハプニングが起った。フィルムを入れてきたケースと中身が違っていたのだった。

入っていたフィルムは、フランス隊によるヒマラヤ登頂の記録をダイジェストした総集編ともいえるもので、マカルー西稜のフィルムと信じて携えて来られたセニール

「中国登山研究」

の再版について

西堀会長の訪中によって、中国登山協会の交流が夢ではなくなってきました。

「山」三九〇～三九二号に片山全平氏が「中国登山界の沿革と現状」を紹介されておられます。

私共では、一九七五年にこれまでに集めた中国登山界の資料をまとめ「中国登山研究」三号を発刊しています。この本は北京放送局、中国通信社などの協力を得て編集されたもので、中国の登山活動初期からの資料(ミニヤコンカー、シシャパングマ登頂等の他、七五年のチムラマ峰再登頂の全報道記録、登山年表、それにチベット自治区のこととも紹介した二〇〇頁の本です。

現在これだけの資料をまとめた「中国登山のすべて」といえる本は、他にないものと自負しております。

最近この本を欲しいという会員からのお訪ねが多く再版しました。残部が少なくなっていますが、中国の登山活動に興味をもつ方に、七七年七月のトムール峰登頂の記録も添えて一冊実費送料とも一〇〇〇円でおわけ

しています。

中国登山界の現状を知ることによって、日中友好の増進と日中登山交流が促進されることを祈念するものです。

△連絡先▽新潟県上越市下荒浜海水化工アパート二〇八 渡辺 義一郎

『スイス・アルプス

風土記』の出版記念会

会員宮下啓三氏が書かれた「スイス・アルプス風土記」出版を「遅く祝う会」が4月13日夜、東京九段のホテル・グランドパレスで開かれた。山岳会、慶応義塾関係から八十余名が集まり、盛会だった。冒頭、発起人代表の三田幸夫氏が、大島亮吉氏との交友を語り、慶応の山岳文人の流れがつづいていることをよろこびとすると、愛情ある挨拶を送り、独文科学子学生も多数参集、山の本の出版記念会にはめずらしく、はなやいだ会だった。

三田幸夫氏

「守れ権現」を歌う

前記出版記念会の終了後、義塾の女子学生に囲まれて三田幸夫氏は会のルームに流れこみ、その席上、三田氏は、慶応山岳部々歌「守れ権現」を正調で披露。三田氏と付合いの深い年配会員も「三田さんの歌うのをはじめてきた」と、おおよろこび。テープレコーダーの準備が間に合わなかったのは後世に悔いを残すことになりそう。

第28回三水会便り

(毎回午後6時30分)

(8時)

企画委員会より53年度事業計画が下記の通り内定しました。

*4月15・16日現地集会(31回)

*荒船鉾泉・物語り山(エーデルワイスと合同) 締切4月10日 係坂倉・高田

*4月19日(水) 32回例会

*奥武蔵の今昔を語る 講師 師飯倉登喜子さん 係進藤・菅野

*5月17日(水) 33回例会

*続山菜の話 講師 片岡氏 係斎藤(健)・高田

*5月20・21日 木暮祭参加(現地集会) 主催 山梨支部

*6月3・4日 ウェストン祭 主催 信濃支部



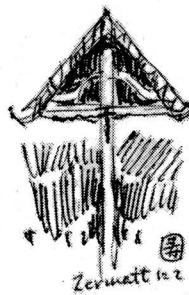
ほか20名
報 告

第三六八回ルーム小集会

ール氏もビックリし、大変恐縮していたが、参会者にとっては、ハプニングのおかげで人類最初の八〇〇米峰アンブルナ遠征の画面をはじめ、マカルー、ムズグタワ、そしてジャヌー……とフランス隊の貴重なフィルムを觀賞することが出来て楽しい集いとなった。

映画終了後は、セニール氏を囲み、マカルー西稜のこと、今春試みるというブロード・ピークのこと、来年の無酸素により新ルートからの遠征のこと等々に話に花が咲き、さらには登攀というものに対して「何パーセント成功するか等と下界で考えることよりも、オレは登ってやるんだ……という意志が一番大切だ」と、セニール氏の登山観も披露され、尽きない話題に、たちまち予定時刻となり盛大な拍手をもって閉会した。

(参加者) 堀内章雄 伊藤博夫 永田秀樹 山岸靖彦 神原忠夫 大野晴美 富田美知子 森 正二 山下 潔 河野悠二 宮崎啓介 鈴木雄二 山崎祐和 市川章弘 藤江幾太郎 本山哲雄 入沢郁夫 森川洋佑 秋山利之 高見沢 領 広羽 清 山本 淳 小原晴子 川森左智子 藤原武夫 角田不二 平山武志 鈴木淳平 徳田憲正 勝田房治 鈴木 茂 中河与一 三渡忠臣 神崎忠男 中川 武 小原 俊 加藤 隆 池田智津子 上飯屋正和 中沢光江 和田誠一



当日は、新入会員31名が集まり折井副会長を中心に、山岳会の歴史、活動等についてオリエンテーションを受け盛況のうちに終りました。

△参加者▽関塚貞亨 阿部慎二 福永次男 木村 信 堀尾勝己 鈴木雄二 横田春雄 長嶋正浩 中川龍一 山本 淳 永井憲明 中村 純 菅原広男 高沢英夫 宮崎啓介 本山哲雄 内田 勲 渡部光則 田中謹之介 近藤 緑 長尾武彦 春日直道 平井吉夫 豊田三千代 野川初江 中村一郎 菅野 盈 川上和子 立原 弘 富永志磨子 後藤喜久夫 西堀栄三郎 望月達夫 折井健一 中川 武 新井陽一郎 加藤 隆 池田智津子 小原 俊 和田 誠 上飯屋正和

*6月17〜18日 現地集会(34回) “金峰山”(エーデルワイス合同) 申込締切6月10日
*6月21日(水) 35回例会 “山岳人を語る” 講師山崎(安)氏 係錦織・関塚
*7月19日(水) 36回例会 “穂高とのつき合い” 講師折井(健)氏 係沼倉・中川
○8月は恒例により休みます。
*9月2〜3日 現地集会(37回) 上高地 申込8月26日まで、山研でアンコ餅を葉湯で食べる 係斎藤(健)・関塚

*9月20日(水) 38回例会 “山と人と本” 講師島田・近藤(信) 両氏 係山崎(安)・沼倉
*10月18日(水) 39回例会 “ヨードルとワイン” 係沼倉・斎藤(健)
*11月18〜19日 現地集会(40回) “八子ヶ峰” 係広羽・高田

*12月20日(水) 41回例会 “一年の回顧” 係広羽・勝田・坂本
*1月17日(水) 42回例会 “新年を語る” 係森川・中川・宇津
*2月17〜18日 43回現地集会 “竹寺” 係坂倉・高田・関塚

*2月21日(水) 44回例会

“山岳人の声を聞く”(テープ) 係今井(喜)・坂倉
*3月14日(二水) 45回例会 “山と健康” 講師辰沼氏(交渉中) 係中・斎藤(桂)
○各位にお願い 現地集会のスナックを画集(ルーム備付)に保管したので三水会例会の折、是非お持ち寄り下さい。
○連絡費は原則として4月にお納め頂くことになりました。
新宿区矢来町33沼倉方 日本山岳会三水会

オリエンテーション
雑感
三月二十五日、新入会員の為のオリエンテーションが集会委員会の御尽力で開かれ、新人の私も参加させてもらいました。諸先輩の御話の後もアルコールにひきずられていろいろ今回の席の感想を一つ書けというお話、ひきうけてしまっ、はてさて、何からペンを進めていっていいのやら。

ただ、どんな会であれ組織に自らが入った時はそれぞれの期待があるものと思います。私自身、故郷を離れ、北アルプスの玄関口、松本の学校というよりも山岳部の門をたたいた時の想いはどうであつたらうと、今回の入会のことと共に思い起こしてみるのですが、オリエンテーションの席で、新入会員の方が、各々自己紹介され

たお話と先輩方のお話の中に、山を細くても長く、自らの生活と何らかの関り合いを持ち続けているという御意見が多く、あらためて、自分と山との距離をはっきり認識する必要があるな、と痛感しました。それと会員ならばこの会の中に自ら進んで加わっているというお話、参加していく過程で、この会の伝統なり歴史なりそれをはぐくんできた山とルームの生活が自らのものとなるように思いました。

学生の頃、読んだ本の中に、(たしかマルセル・クルツだったと思うが)「山はすべてにあり、すべては山にある」という文があったのを記憶しています。現在ヒマラヤ遠征の準備におわっている中、日々の暮しと山とルームを結んだ一つの新しい生活が始まろうとしております。(海部光則)

住所変更のお知らせ

スイス山岳会の本部住所は左記のように変りました。

Club Alpin Suisse
(Schweizer Alpen-Club,
Club Alpino Svizzero
Club Alpino Swizer)
Helmplatz 4, CH-3005, Berne

●自然保護情報●

北海道の山の自然と
その保護

辻井達一

北海道の山の自然保護問題としては大雪山がまず第一に挙げられる。大雪縦貫道とよばれる道路は、大雪山の雄峯トムラウシ山の南を十勝川上流から十勝岳およびユコンベツ方面へ抜けるもので、その最高点は標高一五〇〇メートル(後にトンネル案に変更)と計画されていて、一五〇〇メートルといえど本州の高山では二五〇〇メートルに相当する環境である。トムラウシ山周辺は高山植物群落の発達した大雪山でも奥の院ともいふべき原始性に富むところであるから、動植物の保護上はもちろんだ、山そのものにも大きな影響を与えるものとして反対運動が起された。

これより少し前、やはり大雪山の高山帯に達する赤岳道路が途中で中止されている。

北海道の高山植物生は先きのべたように本州中部のそれに比べると平均して一〇〇メートル前後低いところから現われるから我々は容易にお花畑に到達することができる反面、それを破壊する可能性もまた大きいのである。

のである。

大雪山はすでに層雲峡側から黒岳まで、ユコンベツ側から姿見池までロープウェイおよびリフトが架設されており、軽装の登山者が増大している。軽装といえど、時間的にも距離的にも、また標高から安易に考える人が少なくない。北海道の山は原始的な自然の保たれているところに魅力があったはずだし、画一的便利さのみが求められるべきではない。

この問題は、大雪山より今や日高山系で重大になっているといえるだろう。日高山系は北海道の山の中で、もっとも入りにくいと、そのために山の自然が保たれてきたといえる。しかしそれも安心ができなくなってきた。林道が延ばされ、ダムが造られ、日高の山稜へのアプローチははるかに容易になりつつある。

これはたしかに一面では登山についてよろこぶべきことでもある。しかし山の自然にとってはそうではない。山のスケールからいえば大雪山系のそれとは比べるべくもないから荒れだせば自然は失われるのに手間ひまはかからないだろう。

日高は近々国定公園に編入されるらしい。こも土来型の施設が造られることになりそう

で、日高の山と自然が損なわれるのではないかと心配になる。自然公園にもいろいろなパターンがあつていいはずで、たとえば道のない地区が設けられてもよからうと思われ、沢こぎの必要なルートが残されてもいいはずである。

同様なことがもっと小さいが特徴のある山、特別な景観や動植物を持つ山についてもいえる。道南の大平山、夕張山系の崖(キリギシ)山などはその例である。これらの特徴ある山の保護が計られないと北海道の山はその特色とするところの自然を失ってしまうことになりかねないのである。

参考

* 大雪山特集(大雪山の地質・気象・植物・動物・国立公園の沿革・大雪山登山史・大雪縦貫道問題など) 北海道自然保護協会誌第十二号(一九七四)

* 続・大雪山特集(気象研究史・地学研究史・構造地形研究史・植物研究史・動物研究史・昆虫研究史など) 北海道自然保護協会誌第十三号(一九七五)

* 辻井達一・風景とその評価・北の山脈第二十四号(一九七六)

売場ご案内

最新入荷の本

中日本アルプス百峰(新妻喜永) 2,900円
中山岳写真1978(山と溪谷社) 2,800円
中雑木林の四季(足田輝一) 550円
中スキーアルビニズム4号 550円
中沢登りルート図集100選(沢登り研究会) 980円

尾瀬に関する本・参考書など

中尾瀬に死す(平野長靖) 800円
中カラー尾瀬(山と溪谷社) 980円
中はるかな尾瀬(朝日新聞前橋支局編) 1500円
中尾瀬松枝岐温泉(橘喜一郎) 500円
中尾瀬の湿原をさぐる(堀正) 900円
中尾瀬の自然観察(日本自然保護協会) 250円
中夏山JOY—尾瀬特別号(山と溪谷社) 880円

茗溪堂

〈山の本の売場〉 お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

会務報告

3月理事会

3月6日午後6時30分
本会ルーム

▽出席者 西堀会長、望月、折井、各副会長、宮下、山本、小倉、中川、大森(久)、皆川、鈴木、大森(薫)、黒石、越田、田村、牧野内各理事、浜野、山崎、金在、小原各評議員

委任 高遠、浅田各理事

▽議案

・昭和53年度事業計画案承認の件

(宮下) 承認

・昭和53年度収支予算案承認の件

(山本) 承認

・総会日時の件

5月12日(金) 午後6時

会場 市ヶ谷・私学会館7階ホール

▽報告事項

・会長帰国報告 (西堀)

・学生部年報出来上る(牧野内)

・集会委員会 (中川)

3月25日 新入会員オリエンテーション(午後2時5分、本会ルーム)

5月12日 山菜山行・会津駒ヶ岳

4月29日 上高地山研オープン (小倉)

・山研

・山研

・山研

追悼 深田志げ子さん

深田志げ子さんが三月二十三日七時過ぎ、自宅近くの道路で交通事故に遭われ、重態であると知ったのは一日後の二十四日十一時頃だった。まことに驚いた。二十一日大聖寺に於いての第七回九山忌の折にお元気なお姿に接し、あれこれと歓談したからである。御子息森太郎、沢二両君らの御看護の甲斐もなく二十五日午前四時十九分入院先の菊池外科医院で永眠されたという悲報が大聖寺に届いた。二十六日早朝、市原聖城子君と私が、御葬儀に参列の為上京。御宅に行く。御霊前に頼づいた。

沢二君の肩を抱いて、思わず私は涙ぐんだ。空はよく晴れていた。お宅の前の通りは参列者の方で一杯、日本山岳会、文学界をはじめ同窓生知友の方々の顔が多かった。

志げ子さんは明治四十一年六月十四日、父木庭泰助、母タツノの長女として東京都文京区駒込西片町十番地に生まれ、東京女高師附属高女を終え、さらに専攻科を卒業。後大聖寺出身の故深田久弥夫人となられ、森太郎、沢二の二子をあげられた。大聖寺に疎開中、夫久弥氏らの創立された錦城山岳会、はつし

ほ旬会員らの活動に惜しみなく声援された。芭蕉忌には夫と共に毎回参加された。久弥氏なきあとは九山忌には必ず出席、会員を励まされた。この間夫の墓や地元の切なる希望を容れられて久弥文学碑も建立に応援された。昨年の四月三日、山梨県茅ヶ岳に九山七周忌追悼記念の登山をされた。金沢、大聖寺からも七名参加、私もその中の一人だった。ふるさと思いの久弥さんの心を心として、志げ子さんはよくふるさとの人々のためには献身されたのである。

(昭和53年3月28日・山下久男)

ルーム日誌 (53年2月)

- 7日(火) 指導委員会 学生部集会
- 13日(月) 理事会
- 14日(火) Sierra Club
- 15日(水) 三水会
- 16日(木) 図書委員会 婦人懇談会委員会
- 18日(土) K.報告会
- 20日(月) 集委員会 「山岳」編集委員会
- 21日(火) 自然保護委員会
- 23日(木) 婦懇研究会
- 24日(金) 指導委員会反省会
- 25日(土) 学生部年報発行準備

28日(火) 山研委員会
今月の来室者 一七八名
会員移動
物故者
六九八三 山口 摂郎 (53・2)
・16
一三〇一 中野 征紀 (53・2)
・26
退会者
五八六一 新部 晃 (53・2)

ウェストン祭のお知らせ

本年のウェストン祭(第32回)は6月4日午前10時です。会員各位のご来会をお待ちしています。

〔訂正〕前号(三九四号)収録、

辻莊一氏の「六十四年目の名のりあい」中、2ページ目上段後から4行目にある「大正四年八月七日」は「大正二年」が正しい旨、辻氏から連絡がありました。

〔お断り〕紙面の都合により、前号からつづく予定の「図書受入報告」は休ませていただきました。

昭和五十三年五月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

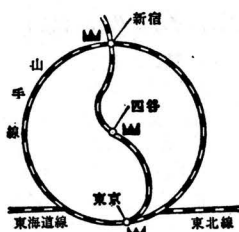
発行者 西堀栄三郎
編集代表 大森久雄

電話東京(03)四四三三三
振替口座東京三三八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂一丁目三番六号

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●買いやすい
山の店●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番信用と知識を売る
山の専門店登山用具は
せひ! 山荘
中央区八重洲 2の1の11
8281-8456

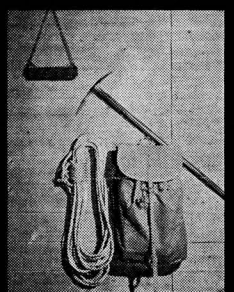
登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718登山・スキー用具の専門店
エーデルワイスマークの

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 ☎(03) (561) 3600
スキーショップ ☎(03) (561) 0966
吉祥寺近鉄店・吉祥寺近鉄7階 ☎(0422) (21) 3331 (代)
大塚店・北区豊島町1-2-8 ☎(03) (354) 0933 (代)
柳店・北区豊島町2-7-2 ☎(06) (315) 7985 (代)
大塚三軒店・北区三軒新館2階 ☎(06) (203) 1331
セシルシー店・千代田中央セシル1階 ☎(06) (833) 0123
福岡店・博多区須崎町1-4 ☎(092) (281) 3440



山の本

織内信彦

快晴の山

A五判三二五頁 定価二、五〇〇円
氷ノ山以来五年間の山行がみな好天に恵まれ：

川崎精雄

山を見る日

A五判三四八頁 定価二、九〇〇円
深い山登りの世界を綴った『雪山・叡山』の続編

坂倉登喜子

エーデルワイスの詩

A五判三四五頁 定価二、四〇〇円
風雪に耐えて咲く可憐な花を求めての山歩き

渡辺公平

山は満員

A五判三六〇頁 定価二、二〇〇円
豊かな自然との交流に趣きがある山行記

島田 巽

山・人・本

A五判三七四頁 定価二、四〇〇円
山と本とのめぐりあい心暖まる人との交わり

加藤泰安

森林・草原・氷河

A五判四八二頁 定価二、五〇〇円
蒙古、ヒマラヤなど登山と探検の記録的叙述

望月達夫

遠い山 近い山

B六判三〇四頁 定価一、五〇〇円
ひっそりとした山や峠の遍歴の楽しさを語る

藤島敏男

山に忘れたパイプ

A六判五八〇頁 定価三、二〇〇円
生涯に及ぶ山登りの紀行を中心に随想書評等

日本山岳会編

一九七八年版山日記

A六判ケツト判 定価九五〇円
山党同志の洒落た贈物にプレゼントカード付

茗 溪 堂

101 東京都千代田区神田駿河台2-1 電話03-291-9442 振替東京8-24723 ●お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。